

# 昔話を聞いて 楽しもう

語り継がれてきた民話や昔話を聞いて楽しむ教材「聞いて楽しもう」。耳から入ってくる言葉から物語の世界を想像し、民話や昔話を楽しむことで、どのような力が育まれるのでしょうか。提言や実践紹介、Q & Aを通して探り、指導の工夫についてご紹介します。

## 「聞く」ことで想像力を養う

お茶の水女子大学 名誉教授  
内田伸子

### 日本語と「聞く」こと

——教科書では、六学年を通して、昔話を聞いて楽しむ教材を位置づけています。

聞くことと想像すること。この二つには、とても重要な関わりがあります。それを説明する前に、まず、日本語の特徴についてお話しします。

実は、日本語は、語を構成する音声の最小単位である「音素」がきわめて少ない言語なんです。ですから、その音素を組み合わせて作られる語も、当然少なくなる。同音異義や異字同訓の言葉が多いことから、それが分かります。「語を作る」という点では、不利な言語といえるでしょうね。では、不利な言語といえるでしょうか。補っているのか。ここで活躍しているのが、オノマトペ（擬声語・擬態語）です。例えば、犬の鳴き声「ワンワン」を、「犬」という名詞の代わりに使うことがありますね。こんなふうに、オノマトペを名詞・形容詞・

副詞として使い、音・様子などを模して表すことで、足りない部分を補っているのです。豊富なオノマトペをこのように活用していることは、日本語の大きな特徴です。

——私たちは、音や様子などを感覚的に表した言葉を、敏感に聞き分けられているというのでしょうか。

音の響きを感じする力が磨かれている、といえるかもしれませんね。小さな頃からオノマトペという音楽的効果をもつ言葉に囲まれて育つわけですから。

以前、二歳ぐらいの子を対象に、こんな実験をしたことがあります。まず、子どもに、人が歩いているところを見せます。一方は、さつさと歩き、もう一方は、ドタバタと歩いているところ。「ドタバタ歩く」はどっち?と尋ねると、多くの子が、正しく、ドタバタ歩いていたほうを指しました。二歳の子でも、音の響きを様子と結び付けることができるというわけです。

そもそも、音調やリズムなどといった、

音楽的な刺激を受け取る感覚器は、胎児期のごく初期の段階で発達します。受胎して十八週頃には、手足を動かす運動野とともに、聴覚神経系が機能し始め、耳が働くようになります。私たちは、お母さんのおなかの中にいるときから、音を聞いているんですね。そんな時期からずっと、日本語を耳にしているのですから、音の響きとそれが表す様子を、直感的に結び付けて聞く力にたけていると考えられます。

### 想像するって、 どういうこと?

——小さな頃から気づかないうちに、聞いて想像することを繰り返してきているのですね。

そうですね。ここで、想像するということについて、少し詳しくお話ししましょう。想像とは、目の前にある情報から、そこにはない部分を思い描くことです。このと



イラスト：田上千晶

き、目の前の出来事や言葉から類推を働かせ、連想される経験を記憶の中から引つ張り出して複合し、脈絡をつける——そういう作用が私たちの脳内では起こっているんです。経験、つまり、自分の五官（感覚器官）を使った体験と、人から聞いたり本で知ったりした疑似体験が、想像するときの材料となるわけですね。ですから、経験が豊かであればあるほど、作り出すイメージは豊かになります。

——その想像の材料には、それまでに出会った物語によって、感じたり考えたりしたことも含まれますか。

もちろん、そうやって獲得した知識も想像の材料となります。読書や読み聞かせを聞くことを重ねればそれだけ、想像力は豊かになっていくことですね。

一方で、想像するときには「類推の力」を養うことも大切です。そのためには、「類推を働かせて想像する」という行為を繰り返していくことです。

当然、これは読書によって身につくものですね。ただ、ここで一つ、踏まえておきたいことがあります。それは、「文字を読む」というそのこと自体、子どもにとっては負担が大きいものだ、ということ。読んで想像するには、文字を処理することと、類推

を働かせることという、二つの作業を同時にこなさなければなりません。情報処理の容量が小さい子どもにとって、これは大変なことなんです。

その点「聞く」ことは、乳幼児期からずっと慣れ親しんできたこと。類推を働かせるためのトレーニングとして、聞いて想像することを取り入れるというのは、子どもたちの負担を軽減する、よい手立てだと思います。トレーニングが必要なのは、低学年に限ったことではありません。読み聞かせを聞く時間は、高学年になっても大切にしてください。私は考えています。

## 高学年でも読み聞かせを



——読み聞かせは、高学年の子どもたちにとっても意味があることなのですか。

そう。それは、子どもの認知発達という点からいえることなんです。九歳の終わり頃、ちょうど高学年に差しかかる時期ですね。第三次認知革命と私が呼ぶ変化が起こり、抽象的な思考が可能となります。これにより、意思の力、判断力、モラルや情緒が育ってきます。

言語を対象化して捉える「メタ言語意識」

楽しい経験です。それは、読み聞かせや朗読には、読み手の解釈によって表現される、抑揚や音調、リズムなどといった、韻律（ブロンディー）が含まれているからだと考えられます。

四歳と五歳の子を対象にした実験があります。ある絵本を、抑揚やリズムをつけて読んだときと、抑揚やリズムはつけず、速さはそのまま一本調子に読んだときとで、内容理解がどのように違うかを調べた実験です。結果、話の内容を正確に理解するという点では、大きな差は見られませんでしたが、しかし、主人公の心情を理解するという点では、抑揚やリズムがあるものを聞いた子のほうが、得点が高かったのです。

——読み手の声に含まれる抑揚やリズムも、想像に役立っているのですか。

韻律などの音に関わるものは感性に働きかけるということでしょうね。これは幼児の実験ですが、もちろん大人でも同じこと

そうした思考の操作を促す意味でも、想像に結び付けやすい読み聞かせという方法を、ぜひ高学年で取り入れてもらえたらと考えています。言うまでもないことですが、読んで聞かせるときに、言葉に解説を加える必要はありません。子どもたちは、自発的に考えます。ただ真心込めて、語りかけるように読み聞かせることが大切なのです。低学年のときに出会ったことのあるお話を、高学年でもう一度聞くといいものもいくつかあります。感じ方は全く違ってくると思いますから。

## 聞くことで、浸れる

——読んでくれる人の読み方しだいで、感じるものが違ってきそうなのも、読み聞かせのおもしろいところだと思います。

誰かに物語を読み聞かせてもらうことは、お話の世界に浸れるという意味で、とても

が強くなるのもこの時期です。言葉の意味や働きについて、客観的に考えることができるようになります。例えば、「ゴーゴー」と山を揺すって、風が吹いてきた」という表現に出会ったとき、「なぜピューピューではないのかな」「ゴーゴーというのは、次から次へと風が吹いてくる感じを表しているのかな」と考える。言葉を分析的に捉えられるようになってくるんです。

——その言葉が使われている意味にも目を向けるようになる、ということでしょうか。

そういつていいでしょう。そして、このことが、想像力にさらに磨きをかけます。メタ言語意識によってより深く考えたことをもとにして、より豊かなイメージが生まれるのです。この二つは、行ったり来たりしながら高まっていくといえます。

だと思えます。読み聞かせてもらうと、聞いたことを直感的に意味に結び付けたり、心情を踏まえて共感的に理解したりしやすい。きっと、誰かに読んでもらって聞くと、物語の世界により浸れると感じる人は多いのではないのでしょうか。

子どもたちには、折に触れ、読み聞かせの楽しい経験を重ねてもらいたいものです。そして、そのとき大切なのは、抑揚やリズム、間を意識して、語りかけるように読み聞かせるといこと。子どもたちは、きくと真剣に、耳を澄まして聞くはずですよ。

### うちだ・のぶこ

群馬県生まれ。お茶の水女子大学名誉教授、十文字学園女子大学理事・特任教授。学術博士。専門は、発達心理学、認知心理学。文化庁国語審議会委員をはじめ、政府・学会関係の要職を務める。著書に『想像力—創造の泉をさぐる』（講談社）など、共著書に『佐藤学 内田伸子 大津由紀雄が語る 言葉の学び、英語の学び』（ラボ教育センター）など。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。



# 乳幼児期から親しんできた「聞く」こと。 想像力を養うために、 ぜひ取り入れたいですね。